

光の子



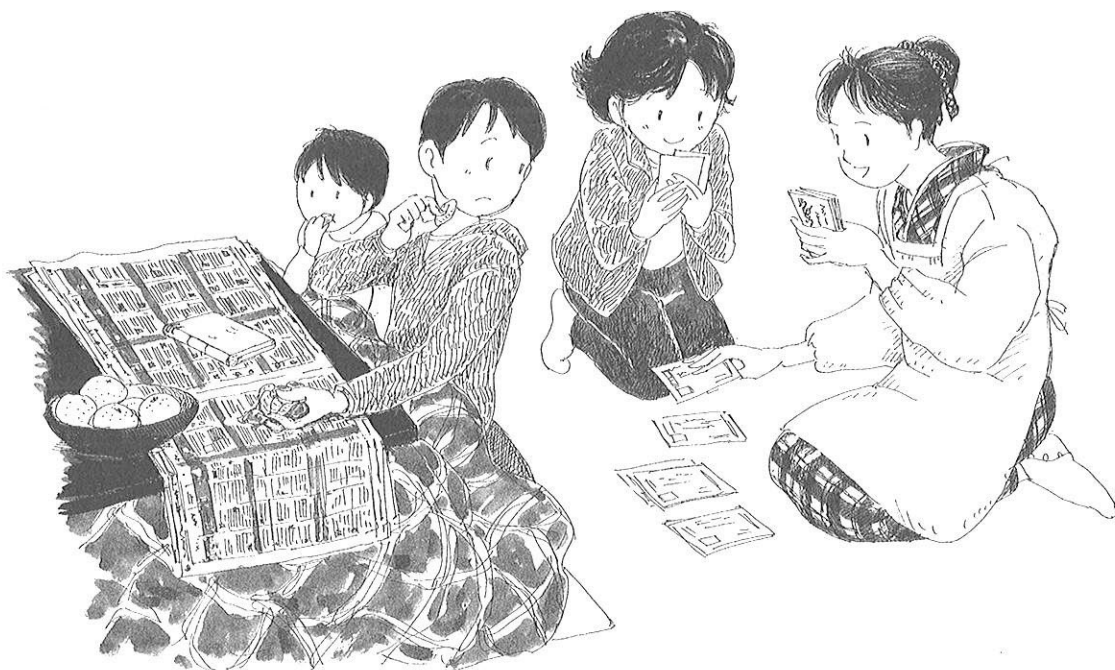
No.151 2012.1.1

●年間聖句 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。

(ルカによる福音書19章10節)

明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願い申し上げます。

社会福祉法人 光の子どもの家



「年賀状」

挿絵・中島由起子

「初景色」

灯台に星の寄り添ひ去年今年

鮎釣の少年に会ふ恵方かな

初景色スカイツリーを加へたる

水餅のほのぼの白き夜明けかな

すつぽりと山影に入るとんどの火

寒月を浴びて雄心をみなにも

結局は母が立ちたる炬燵かな

俳人 黛 まどか

自宅マンションの隣に小さな地藏寺があって、その境内は近所の子供達の遊び場になっている。毎日三時を過ぎると、幼稚園を終えた子供達とその母親達が、誰からともなく集まって、夕暮れまでを共に過ごしている。鬼ごっこで走り回ったり、シャボン玉を吹いたり、チョークでアスファルトに落書きをしたり、おやつを交換したり。少し前までユキと私は、この時間のこの場所が苦手だった。ユキは決まって子供達の輪を避けるようにすり抜け、皆に背を向け一人ぼっちで砂利を拾ったり、タンポポの綿毛を吹いたりして遊んでいた。私はユキの隣にしゃがみ込み、ユキと同じように皆に背を向けていることしかできなかった。

ところが最近、ユキが自分から子供達の輪の中に入っていくようになった。きっかけは、この輪の中に同じマンションに住む同じ歳のみいちゃんがいいたことだった。みいちゃんとは以前から互いの家を行き来し、一緒に遊ぶ機会しばしばあった。ユキが初めて覚えたお友達の名前も

みいちゃんだった。みいちゃんの名前を口にするようになってから、ユキは堰を切ったように周りの人の存在を意識するようになった。ひらがなが読めるようになったことも幸いし、療育のクラスでもお友達や先生の名札と顔を交互に見ては反すうし、次々に名前を覚えていった。名前を呼ぶと相手が応えてくれることを知ると、今度は名前を呼んだ後に自分の手をかざして相手に「タッチ」を求めていくようになった。それはおそらくユキが生まれて初めて手にした他者とのコミュニケーション手段だったのだろう。どこで誰に会っても、ユキは相手の名前を呼んでタッチを交わしたがるようになった。自閉症の特性から、ユキが耳で聞くよりも文字で見る方が言葉を理解しやすいことも分かった。私はノートとサインペンを持ち歩き、会う人会う人の名前をひらがなで書いてユキに見せるのが習慣になっていった。

やがてユキは、いつも避けていた境内で遊ぶ子供達の名前を覚えたが

るようになった。その輪の中に、みいちゃんがいることに安心したのかもしれない。ユキにとって名前を覚えることは、お友達になることだった。シャボン玉が上手に吹けるようになったのも、生まれて初めて顔の絵を地面に書いたのも、この場所だった。もちろん、みんなと同じように出来ることはまだまだ少ない。鬼ごっこも、ルールがわからずみんなの後をくっついて走り回っているだけだ。ボール遊びでは、相手に構わずとんでもないところにボールを投げつけては、みんなから一斉に怒られている。それでもユキはとても楽しそうだった。

「ユキちゃん、耳聞こえないの!」「なんでしゃべらないの?」子供達とはときに率直に疑問をぶつけてくる。そのたびに私はどきどきとする。「ユキちゃんって赤ちゃんみたいだね」とからかわれ、困ったような表情を浮かべているユキを前にして、何も言わずあぐらをかく立ちつくす自分に傷つくこともある。だが子供達に悪気はないのだ。母親の私でさえ、ユキを理解するのに四年かかった。未だに理解できないことだってたくさんある。子供同士で体当たりしながら、少しづつユキのことをわかってもらえればいいのだと思う。

ときには橋渡しが必要になること

もあるだろう。子供達の世界を大切にしながら、親に出来ること、大人達に出来ることは何なのか。自分一人で抱え込まずに、周囲に心を開いて協力を求めているような、そんな素直でしなやかな強さを持つ母親でありたいと思う。

子供達を見ていて、ふと気づいたことがある。私はこれまで、この子供達のことをいわゆる「普通の子」としてひとくくりに捉えていた。だが実際は、一人ひとり実に個性豊かであり、「普通の子」という枠など、そもそも存在しないのではないかと思うようになった。わんぱくが過ぎる子、あまのじゃくな子、癪癪持ちの子。得意なこと苦手なことも、みんなそれぞれだ。仲良くなったり、喧嘩したり、意地悪したり、謝ったり。そうやって少しずつ成長している。

あと三、四年もすれば、この子供達がランドセルを背負ってこの境内をわいわいと登下校する姿が、毎日見られるようになることだろう。その中にユキの笑顔があったら、ときどきそんなことを思い描いたりする。

冬の夕日は真横から子供達を照らし、背丈の何倍にも伸びたいくつもの影の影が、くっついていたり離れたりしている。みんな風の子だ。もうすぐ楽しい冬休みがやって来る。長靴のあかあおきいろ冬やすみ

みちる

「共育ちカンガル―日記」

(16) お友達

近藤みちる

原点回帰

理事長 菅原哲男

昨年はこころみの一年であった。3・11東日本大震災とそれと同時に発生した福島原子力第一発電所の爆発事故は、広島・長崎に次ぐ核爆発と位置づけるべきだろう。これは、子どもを養育する者たちにとつて手の打ちようのない、終わりを予測できない故に前途の見えない災害事故なのである。前が見えなければ希望は生まれえない。子どもが育っていくために、どうしても必要なフアクターがある。自分が必要とされているという意識形成と、自らの役割についての確認である。大きくなったら何になるのか……漠然と、そして次第に痛切にそのことが希求されていくのである。自分の将来を見通し、その希望に向かって成長していくことが子どもの育ちに欠くことの出来ない条件である。

V・E・フランクは、ユダヤ人であることでナチに捕らわれ、アウシュヴィッツから生還した精神医学者である。彼の著書「夜と霧」(みすず書房)で、「自分の未来をよりはや信じていることができなかった者は、収容所内で破綻した。そういう人は未来とともに精神的なよりどころを失い、精神的に自分を見捨て、身体的にも精神的にも破綻していったのだ。」と言っている。彼自身の経験による説得力のある言葉である。

アウシュヴィッツで、収容所の外に手紙を出す相手がいなかったり、耐えて待つて逢いたい人がいなかった人たちが、倒れ亡くなっていたという。希望がない人たちは早く亡くなっていたという。ことである。希望とはこれほど大切な生きる力を与えてくれるものである。

今、特に福島に拘わらず日本のどこでも、特に子どもたちが安心して暮らすことが困難になっている。そして将来を見通すことの出来ない放射性物質の蔓延する中で生きていかなければならなくなったのである。希望は消し飛び見えなくなってしまったのだ。この国の子どもたちの状況は、どんなに誰が強弁してもそのようになってしまっている。

一方、光の子どもの家も私たちのへそに力の入らないような関わりの中で、子どもたちが明確に「否」を出し始めていた一年だった。

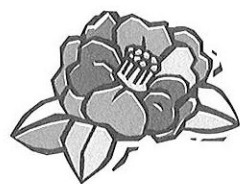
社会にとつても、この年が、明らかにになっていく隠蔽された事実を、人々を信頼して白日の下に曝

し、分析し、向き合い、そして呻吟しながら歩き出す年としたい。光の子どもの家にとつてもそんな年になるだろうと考えている。

起こった問題をよく見極め、その原因を探り出し、解決に向けて困難を克服していかねばならない。易々とは出来ない。誠実でなければ果たせない。自らが痛むであろう渦中に身を投じなければ、解決を見ることは出来ないだろう。何もなかった三十年ほど前、光の子どもの家建設を幻にして、祈り、語り、そしてこのはたらきに身を投じ、用いられたいと願った原点に立ち返り、少しづつ、歩き直していきたい。

この一年、それが出来るかどうか、私たちの決意とその真価が問われている。

これまでに倍するご鞭撻、ご支援をここから願い、それに応えられるはたらきを成し遂げていく決意である。



台所奮戦記

彫刻家 中島 睦雄

「自分の置かれている現実から逃避してはならない。現実を直視し、それに立ち向かわなくてはならない」このような事を読んだり聞いたりする事がある。立派な言葉だと思ふ。正しい理屈だと思ふ。しかし、意志の薄弱な人間にとっては、なかなかむずかしい生き方である。

私は今、一人暮らしを余儀なくされている。男の一人暮らしはなかなか大変である。しかも、これが老人ときては。

或る一人暮らしの先輩が「一人暮らしは良いよ。気が合って良いんだよ。」と言った。それはそうだろう。どんなに気心の知れた関係の人でも、或いは仲の良い夫婦でも、たまには気が合わない事もあるう。

「私はスパゲッティを食べたいわ。」と奥さんが希望したとする。「おれはステーキが食べたいんだ。」などと、小さな部分で気が合わなかったりする事はいくらでもあるう。その点一人暮らしは、自分の食べたいものを勝手に食べれば良く、白

由である。

私の一人の友達が「外食ばかりしてはダメですよ。体を悪くしちゃいますよ。それにインスタント食品。ああいうのには防腐剤がたくさん入っているんだからダメですよ。」と、まるで母親が子供を諭すような口調でたしなめた。そうだろうなあと、私も思う。

昔、単身赴任の人が、インスタント食品ばかり食べ、好きな酒ばかりあおって、体を悪くしてしまつたという話を聞いた事がある。

そこで私は、できる限り自分で食べ物を調理して、なるべく外食やインスタントは避けようと決心した。最近の私の朝食の献立ては次のようなパターンが多い。

前の晩に仕込んでおいた米を、おかゆに、六時にセットしておく。それに味噌汁。油揚げを半分にして、或る程度細かくして小なべに入れる。実は小松菜。先ず、菜の全体を洗い、根コの部分を取り落とす。そして、根に近い部分に少し泥が付いている

事があるので一本一本洗い、全体を刻んでなべに入れる。ダシのもととしょうゆを少し入れて、水を入れて煮立たせる訳である。味噌は後で入れよう。その次は豆腐である。三分の一だけ切って、それを半分に割り、ショウガをすってかける。次に鰯節をカンナで削る。だいたい四十回か五十回削れば充分。それに醤油をたっぷりかける。次は大根おろし。これにしらすを乗せて、醤油をたっぷり。次は魚である。アジの開きは骨ばつかりで、どうも食べる部分が少ない。その点鮭なんかは楽である。塩をまぶして焼く。この頃になると、嗅覚の鋭いネコがやって来てニャーニャーと要求のアピール。最後はレタス。葉を二枚くらい取り、細く刻んでゴマドレッシングをかけ、その上に、いりゴマを小さいすり鉢ですったやつをかける。味噌汁への味噌入れは最後である。

こうやってできた朝食を、テレビを見ながら食べ進む。もち論ネコにも少しオスソワケ。そうそう、新聞を見なくちゃあ。最初に目を通すのは、今日の運勢。これは、朝見なくては意味がない。夜になってから今日の運勢を見たって、もう終わってしまったことだ。しかし、これも朝読みはぐつてしまふと「寝る前に今日の運勢見てるバカ」ということになってしまふ。

「海」の香を秘めて真夏の黒ヒジキ。と。すると、何と季語が二つ矛盾していて、いけませんです。天災魔人の鼻は、ポッキリと折られてしまった。

佳き日々

山形大学前学長 仙道 富士郎

佳き日々の始まりは十一月三日に開催された光の子どもの家の感謝祭の日から始まった。3・11以来鬱々とした日々が続いていた。一部のマスコミによる震災報道に対する憤りと、自分たちが始めようとしている、

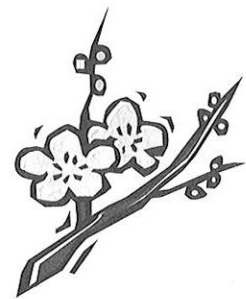
フェイスブックを利用した被災地の子ども支援プロジェクトの進行の遅れへの焦りなどが、渦巻いていた。しかし、辛いことの連続だけでは人は生きられないのかもしれない。辛いとき、人は嬉しいことを見つけようとするようだ。今回の佳き日々を私が探していたと思えないのだが。

子どもたちとの食事会の後、板の間に車座になって色々な話が出た。困難な問題を抱えているこの施設についての菅原理事長を中心にした苦渋に満ちた議論が続いているとき、正座をしたままで、芹

沢俊介氏が話はじめた事どもをいまでも記憶している。「困難な状況に立ち到つたときには、理念に戻って考え直さなければならぬ——」、「倫理性をあまり追求しすぎると、施設は成り立ちいかない——」。そして彼はかなり強い口調で言葉の力について、ご自分の仕事に触れながら、述べられた。菅原君と私は少し酒が入っていたが、芹沢氏はしらふであった。飲んだ酒が醒めて行く感じを覚えた。人が真摯に事をなす姿の美しさに引きつけられたのだ。そしてまた、人に会って話を聞くことの大切さを知った。私は芹沢氏の良い読者ではないが、よしんば良い読者であつたとしても、あの日に彼から受けた強い全体像を著書の中からだけでは、引き出すことは不可能だつたであらうと思うから。帰りの電車の中で、久しぶりに感謝祭に参加した妻と、前の日の感激を語り合いながら「佳き日だったね」とうなずき合った。

その日も、自宅で日経新聞社の山形支局の支局長の取材を受けた。丁寧な取材で時間がかかったが、取材が終わつたあとの談笑で伺つた彼のお兄さんの話には、驚いてしまった。大学を卒業したときに、お兄さんはご両親に頭を下げて以下のようになつたという。「私たちのように美味しいものを食べて生きている人間は世界中で10%しか居ない。飢えている人たちが90%も居るのに、日本でのうのうと生活しているわけにはいかない。これが今生の別れになると思うが許していただきたい。」

お兄さんが出国して三十五年経つが、岩本記者はいまだにお兄さんに会っていないという。あるとき、お兄さんから「体の調子が悪く療養している」という連絡が入り、ご両親は、とる物もとりのあえず、お兄さんがそのとき滞在していたアルゼンチンに出かけて行つた。お兄さんは山奥に入つて貧しい人たちと一緒に生活していたのだから、本来なら、ご両親はお兄さんに会えるはずもなかったのだ。偶然にもお兄さんの写真展がヴェノスアイレスで開催されておりました。そのついでにお会いできたことである。そして、お兄さんに





明けましておめでとうございます



謹んで新春のお祝いを申し上げます。旧年はお世話になりました。光の子どもの家も皆様のおかげで、無事に二十七日目の新年を迎えることができました。子どもたちも皆様の応援を受けてすくすく育っております。子どもたちに負けない様、今年は、より一層の努力をしていきたいと思っております。今後ともかわらぬご支援とご指導をよろしくお願いいたします。

明けましておめでとうございます。寒い日が続きますが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？
私事ですが、最近本を読む機会が増えました。きつかけは何か？と言われると自分でも良くわかりません。昔から落ち着いて時間を過ごす事が苦手で、僕に「読書」というのは無縁なものだと思っていました。これは僕の仕事を知っている人達にとって見れば奇跡に近い事だと思ふ人も少なくないと思います。
そんなこともあり、今年は「趣味は読書」と言い切れる位の本を読んで見ても良いんじゃないかと思っています。
今年一年も皆様のご健康を祈って、新年の挨拶とさせていただきます。

田中 要一

明けましておめでとうございます。一言が、とても身に染みた年でした。今年は笑顔を忘れずに、より多くの時間を原田家で過ごすことができました。ありがとうございます。よろしくお祈り致します。

和田 優子

今年、地方自治体の名の下、国から地方自治体に権限等が委譲されます。この児童養護施設の世界も例外ではなく、最低基準が各地方自治体で審議され条理化されます。国から示されたものは、「守るべき基準」「参酌される基準」となっており、最も守られるべき弱者である子どもたちの生活が、各地方自治体の財政力で変わるかもしれない危険な状況にあり、地方自治体によって受けられるサービスの内容が変わってしまうということが起きるのではと、危機感と不安を感じております。私たち児童養護施設業界は弱い団体です。どうか皆様方には、社会的に弱い立場である子どもたちのために、これからの地方自治体の動きに目を光らせていただきたいと、心よりお願い申し上げます。

新しい年、皆様方のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。

施設長 田中 郁夫

明けましておめでとうございます。昨年は大変お世話になりました。本年もどうぞよろしくお祈りいたします。

鎌田 洋子

新年あけましておめでとうございます。いつも暖かいご支援を頂き、心より感謝申し上げます。
今年も年末の餅つきを全員で作業しますが、年々増えていく杵手に対して、こねとりの少ない事で困っております。お正月には卒園生が家族を連れて実家の光の子どもの家に来ては、お土産のお餅を持って帰ります。ありがたい事に、餅米も秋に戴き、準備が八分位出来て居ります。感謝でございます。七ヶ口のお餅の準備も、子どもたちの笑顔を楽しみにして、あんこ餅、からみ餅、きな粉餅、納豆餅、お雑煮と盛り出しのメニューです。安心して餅つきの出来る幸せをありがたく思い、ただただ感謝しております。

平和な一年をお迎え出来ますようにお祈り致します。

皆様のご健康とを祈り申し上げます。
あけましておめでとうございます。今年、わたたくしは年男です。十二年前と比べると世の中は大きく変わったように思えますが、自分自身はまだ変わっていないような気がします。でも二十四年前と比べるとかなり変わっています。節目の年として大きく前進できるよう頑張りたいと思います。今年もどうぞよろしくお願い致します。

福島 文明

明けましておめでとうございます。昨年、皆様から心温まるお言葉をいただき感謝いたします。新たな年を迎え、子ども達と共に心から生活を築きあげることが出来る日常を目指して励む決意であります。皆様に大いなる祝福がありますようにお祈りいたします。

穴水 祐介

明けましておめでとうございます。昨年は、皆様から心温まるお言葉をいただき感謝いたします。新たな年を迎え、子ども達と共に心から生活を築きあげることが出来る日常を目指して励む決意であります。皆様に大いなる祝福がありますようにお祈りいたします。

副施設長 竹花 信恵

新年あけましておめでとうございます。今年も子どもたちのどんな成長がみられるのか今から楽しみです。
泣いたり笑ったり怒ったり。初心を忘れずに、豊かな生活作りを目指していきたいと思っておりますので、今年もよろしくお願い致します。

牧野 由紀子

明けましておめでとうございます。旧年中は多くの方にご支援いただき、誠にありがとうございます。本年もよろしくお願い致します。

新年あけましておめでとうございます。皆さまの温かいご支援を心より感謝申し上げます。
子どもたちがすくすくと育っているのは、周りの方々の温かい眼差しと、支援の輪の中で安心して過ごすことが出来る日常があるからだと思っております。本当にありがたいと思っております。
今年もご支援下さる皆様にとって、健康で喜びに満ち溢れた年になることをお祈り申し上げます。

梅田 由味子

幼稚園から帰って来るやいなや、食堂のおばちゃんたちに「たたいまー」と元気な声を聞かせてくれる子どもたち。俯きながら帰ってきてチラと目をやるだけのお年頃な子どもたち。そんな子どもたちを見ていて、ちょっと様子が違うな。と気付いた時には、献立にはないその子の好きな料理を一品加えて話の種に。そんなちょっとした働きかけが、子どもたちには必要なのかも知れません。
今年はその働きかけを目指して歩みたいと思います。

平川 光子

あけましておめでとうございます。子ども達とともに、三度目の正月を無事迎えられることを嬉しく思います。去年は自身の至らなさに空しさを覚えることもありましたが、その度に子ども達に支えられていた

今年、正月も少しでも良いので、顔を出して欲しい、元気で暮らすでなくとも。とにかく顔をみたいと思っております。

田口 貴子

新年あけましておめでとうございます。寒さが厳しくなってきた今日この頃、皆様はいかがお過ごしでしょうか。
先日卒園生の華美が久しぶりに帰ってきました。ゆつくりする事は出来ませんでした。一緒に温泉に入り、色々な話をしました。彼女の仕事上の愚痴や、こちらにいらしたときの思い出話、趣味の話。こちらにいらした姿を見るたびに、「ここに居たときはこんな時間を持てるようになったとは思わなかった」と思います。離れて生活する彼女が本当に辛くなると、こちらの職員に連絡をくれます。皆が彼女の事を気にかけている事が伝わっているのだらうと嬉しいと思う一方、これからはつながり続けてくれるだろうかと思っております。

今年、正月も少しでも良いので、顔を出して欲しい、元気で暮らすでなくとも。とにかく顔をみたいと思っております。

年を通して、ご支援をいただいている方々、光の子どもの家の先輩方、子どもたちと様々な方に助けられたと実感しております。

そうした方々の支援に少しでも答えるよう、子どもたちにとって、豊かな生活の場を作って行けるよう尽力してまいります。

坂田 光一

新年あけましておめでとうございます。今年度より光の子どもの家でお手伝いさせていただいております。この冬は子どもたちと初めてのお正月を迎えさせていただきます。

子どもたちがのびのびとすこやかに元気に過ごさせて頂いておりますのは、皆さまのあたたかいご支援のおかげです。

と心より感謝致します。

これからも子どもたちの心の成長、身体の成長のお手伝いを精一杯、全身全霊でがんばっていききたいと思っております。

今年もみなさまにとって良き一年でありますようにお祈り申し上げます。

藤沼 幸子

あけましておめでとうございます。昨年中は大変お世話になりました。今年は先輩職員の良いところを見習い、もっと良い働きをしていきたいと思っております。

本年もよろしくお願い致します。

細瀬 野宜江

プリズム

子どもたちの季節 仙道家

新年明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願い致します。

また一年が経ち、子どもたちはそれぞれに成長を見せてくれます。一人ひとりのことを色々考えながら、日々見守っています。

中学三年生の真理は今年、高校受験という高いハードルに挑んでいます。現在も志望校選びに悩み、揺れています。中学一年の時「学校に行きたくない」という時期があり、友人のことや家族のことなどで色々悩み、考え、葛藤

光の中で

佐藤家

新年明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。

皆様、いかがお過ごしですか。昨年色々な事がありました。

子どもたちの成長は子どもたちの努力はもちろん、周りの方、とりわけ子どもたちに日常的に関わって下さっている学校の先生方をはじめ、級友の方々、地域の方々のご理解があつてのことだと、心から感謝しています。

先日、幼稚園で表現発表会が行われました。年長の広司にとって

は、最後の発表会です。発表会の一ヶ月くらい前から、家でもダンスや太鼓の練習をしていました。いよいよ本番の日、広司は特に緊張することもなく、堂々とダンスや太鼓をやり遂げることができました。広司が舞台上で踊っている姿を見ていると、広司と出会った三年半前から今までのことが走馬燈のようによみがえってきました。

家ではまだまだ甘えん坊だけれど、本当にかっこいいお兄ちゃんになったなあ……と実感しました。広司には、残り少ない幼稚園生活を精一杯楽しんで、希望を持って小学校入学を迎えてほしいと思います。

広司のかっこいいランドセル姿が今から楽しみです。

最後になりましたが、今年も子どもたちを温かく見守って下さいますよう、よろしくお願い致します。

高野 真夕子

原田家日記

新年明けましておめでとうございます。昨年は大変お世話になりました。今年もよろしくお願い致します。

昨年は東日本大震災・福島原発事故が起き、たくさんの方々が辛く悲しい思いをされました。今もそれは続いています。みんなが少しでも笑顔であたたかい新年を迎えられたらと願います。

小野姉妹の妹・美歩は、ぼつちやり系の小学五年生。元気で明るく誰にでも愛されるキャラクター。わがままで言いたいことを言っているように見えますし、何を言われても気にしないように見えます。

だからでしょうか、体型についても「でぶ」「ぶた」など、ひどいことを言われることがあります。その度に「ちがうから!」とふてくされたり「別にいいし」と意に

介さないようなことを言うこともあります。

しかし、姉とのかかわりや担当である私に充分甘えを受けとめてもらえないなど我慢しなければならぬことが多く、美歩はそのストレスから髪の毛を抜き始めました。ポーツとしている時にいつのまにか抜いてしまうのです。抜けた部分は毛が無く、周りの人が気付くほどでした。

今は治まってきましたが「わがままで言いたい放題だからストレスはないだろう」という短絡的な考えを私はしていたのだろうと思います。

思い込みや決めつけなしに子どもに接していこうと自戒しています。

池田 祐子

季節のおとずれ

竹花家

明けましておめでとうございます。昨年中は大変お世話になりました。本年もよろしくお願い申し上げます。

竹花家の子どもたちの二〇一一年を振り返りますと、五人それぞれ成長は並大抵のものではないなあ、ほんの一年でこんなにも成長するんだなあ、と、尊敬の念を抱

きながら思います。欠けの多い私たちの関わりの中でも、身体も心も大きく成長し、新しい面が次々と表れる。そんな子どもたちを見ていると、やはり神さまはいるんだなあと思います。

運動面で非常に活発になり、些細なことでもグズグズすることの減った楓。今年初めて持久走大会を歩くことなく完走した葵。持ち前の負けん気で今まで興味の薄かった勉強に励み、学年順位を大幅に上げた美也子。中学校のクラスでは相変わらずちょっと斜に構えています。このままではダメだと思いつき始めています。色々と思いつきながらも高校の担任に支えられながら卒業を目指して、毎日の生活に真面目に向き合い始めた清貴。

こんな素晴らしい子どもたちと共に今年も正月を迎えられる事を改めて感謝し、この年も大きな成長を見せてくれる事を願いながら、日々大切に過ごしていこうと決心しております。

鈴木 洋一

河のほとり

倉澤家

あけましておめでとうございます。昨年中は大変お世話になりました。

した。今年もよろしくお願い致します。

今年の倉澤家には二人の受験生がいます。一人は高校受験を控えた真祐、もう一人は四月から社会に出発つ（たびだつ）予定の由子です。

真祐は三年生になってから学習に目覚め、塾の利用や指導員との学習、更に朝早く登校して友人と学習——とがんばってきました。ただ本人はもっと早く目覚めればよかったと後悔しているようです。志望校もかたまりつつあり、入試に備えています。

一方、由子は進学か就職か迷った末に就職を選択し、介護の仕事のできる就職先を見つけるために就職活動中です。高校卒業後、すぐに社会へ出るのは少々不安ですが、本人の意志は固く、自立に向けてがんばろうという意思表示の一つなのかな、二期からは自分で弁当を作っています。

こんな二人のがんばりの成果が出るよう、最後まであきらめずがんばろうと励ましていきたいと思っています。

次回のプリズムで二人が希望する進路に進めたご報告ができますようにと祈っています。

倉澤 智子

養育論の試み その6

菅原 哲男

暮らしをつくる

光の子どもの家が始まって以来、事業計画に、「生活づくり」という項目が、他の十項目と共に並んでいる。多くの場合、人が生まれ育つという営みは、家庭において家族が育ててきた。家族によつて営まれる暮らしは子どもが育ち、育てられる土壌なのである。心を込めて丹精された土壌は生き物をよりよく育てる。そのような土壌が家庭における家族の暮らしなのである。その暮らしは生活である。だから生活づくりは子どもを育て、子どもが育つための、必要十分条件を整えることを目標とする。

光の子どもの家が歩き始めた最初は、施設本体から離れた通常の街中に家屋を借り上げて展開する、グループホームが珍しい頃であった。

児童養護施設に貸すぐらいなら空けたままにしておく、というご当地気質もあつて、なかなか一軒家をお借りすることが難しく、それまでは一階と二階が上下になるアパートを二軒借りて、保育士が担当する一所帯が暮らすという、不便を託ちなが

その数年後に手頃な物件を借りて
ようやく五人の子どもと保育士が暮
らす、本格的なグループホームを展
開することが出来た。

さて、家には表札が必要だ。どう
いう表札にするのか考えた。最初か
ら「チュウリップ」とか「光の子ど
もの家分園」などという施設ばい看
板は考えもしなかった。一組の鎌倉
という姓のきょうだい、福岡、高山
大川の四つの姓の子どもたちである
子どもたちの家なのである。どの子
の苗字をとるのか迷った。そしてその
頃は若手だったが今は主任の倉澤保
土が担当である。

グループホームは地域に暮らす普通の家として存在する。普通の家の地域との関わりこそ重要である。

新たに引つ越す家族として関わりを始めなければならない。引つ越し蕎麦やタオルなどを配つて挨拶をしてその地域の住民になる。地域との関わりは大人が中心になって切り開かれ展開されていく。だから担当者
の苗字を代表させることにして

「倉澤家」で今に至っている。

一見なんでもないことのようにあるが子どもたちにしてみればこれは相当やっかいなことであつた。

ある日倉澤が、子どもたちに「表札にゾウキンをかけたの誰？」と注意していた。それでも数日「倉澤」という表札は、汚れたゾウキンのかげ場所になっていた。

その日は他の家で朝食を食べて中学生が登校する頃倉澤家にやってきた。女子中学生が扉を細めに開けてきよろきよろ辺りを見回して表札にひよいとゾウキンをかけて、自転車に乗ってでかけていった。

二歳できた「鎌倉」姓の女の子が、中学二年になった初夏だった。鎌倉という姓を持つ子どもが、しかも中学二年という年齢の女子が「倉澤」という表札の家を出入りするのである。丁寧に偽装されたが児童養護施設に分園であることには違いがない。その巧みな偽装に思春期の、ことさらに女子は気づくのが早いのである。

鎌倉紗英という名の中学二年生にとつて「倉澤」という表札の家を自分の家と言うには抵抗がある。また大人の偽装を許せないのである。他者の眼もうんと気になる年頃なのだもつと言へば、施設を利用している自分さえが許せないのある。自らのアイデンティティの問題である。

迂闊にも「子どものための子ども

の家」など言いながら、どうして倉澤という家でなければならぬのかの必然性の説明も子どもたちにはしていなかった。

すぐに「倉澤」の表札を取り外して土曜日を待ち、子どもたちと、表札のない家はおかしいからどんな表札にすればいいかという話をした。誰も何も言わなかった。「児童養護施設光の子どもの家分園というのはどうだろう?」みんな「いやだ!」といった。二人という一番多い苗字にしようかと提案したが、誰もいいとは言わなかった。

たとえばみんながここに来ないで
お父さんのお姉さんであるおばさん
の家で暮らしていたら、違う苗字の
家で暮らすことになる。

わたしの秋田の田舎の小学校までは四キロメートルあって、冬には雪が深くなり学校に通うのが大変で学校の近くにいた母の妹のおばさんの家で四ヶ月暮らしたことがある。違う苗字の家だったがあんまり気にならなかった、などと話した。丁寧に説明して、結局、倉澤家で落ち着いた。現在、本國三軒と他のグループホーム一軒の家の名については、開設当初の理事の苗字をお借りしている。

「生活づくり」の取り組みは、今なお試行錯誤の連続である。

現場から

続・光子らしく

謹んで新年のごあいさつを申し上げます。今ある命を愛しんで大切に生きていきたいと願っています。どうぞ本年もよろしく願います。

先日、萌季がやってきて一週間ほど泊まっていました。彼女が勤めている会社も経費削減なのでしよう。社員は自宅勤務になって早二ヶ月。

「人間として駄目になりそう……」
と、いつになく弱気な萌季を、
「いいよ、いいよ。好きなだけ居
たらいいよ。大歓迎だよ。」
と、できるだけ明るく迎えました

岩崎まり子

「理奈はいつも通り、
理奈の布団で寝ていいよ。」

萌季にはこっそり、

「他に部屋もあるし、布団もあるから、どちらでも大丈夫だから。」

理奈の布団で寝てくれました。皆と食事をしたり、仕事をしたり、しゃべったり、テレビを観たりして、萌季はアパートへ戻っていきました。

「いい気分転換ができました。ありがとう。」

というメールが来て、ちよつと安心しました。

「理奈にすっごいやされた。」

という萌季の言葉を聞いて、何だかとてもあたたかな気持ちになりました。

ここには多種多様な人とのつながりがあります。私がつけているものだけでなく、知らないところでのつながりもあるでしょう。

時々、その意外性に驚かされたりもします。

以前は、「人は建物に帰ってくるのではなく、人に帰ってくる」という言葉をとても狭い意味で考え、納得していたように思います
「ここに〇〇さんが居るから——
——それも本当のことでしょう。その言葉と責任感と使命感を胸に、私は踏ん張ってきたのです。

けれど、ここに帰ってくる卒園生たちは、きっかけである。〇〇さん“をこえて、ここで新たなつ

ワカゾク 作 大晦日...

あ、このうた、
しってる！

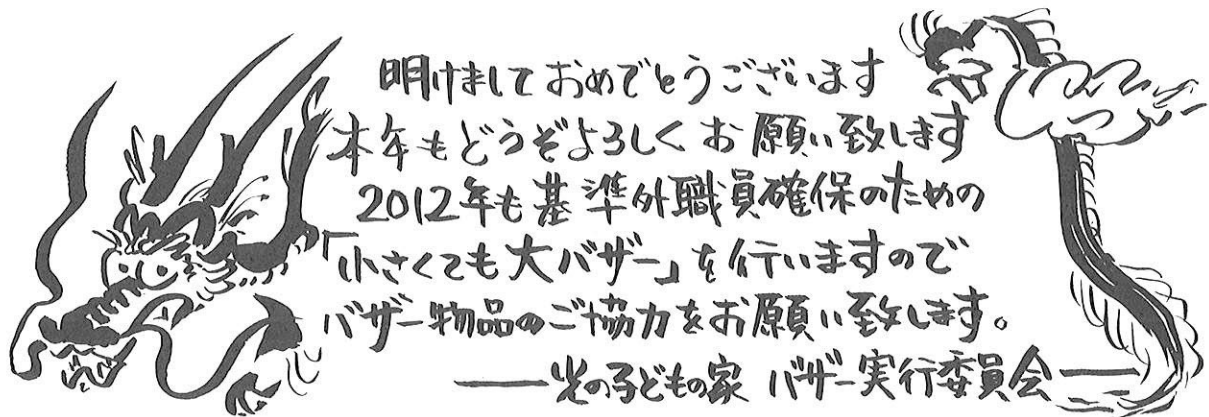
ボクらは
アイのほな
イカソーヤ

あ、
キンキキッズね。

ふん、
キンキ
キツネか、
ハシ

来年、あの子は顔を見せてくれるだろうか。今、中学生のあの子は帰ってくるだろうか。まさしく今、つくっている生活の醸し出す雰囲気、今の子どもたちにもそして卒園生たちにも同じような影響を与えるのだと思います。つながることがとても難しいと感じることも少なくありませんが、あきらめずに少しずつ進んでいきたいと思います。

皆さまの健康が守られる一年でありますように……。



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2011年10月1日▶11月末日

2011年10月現在

幼児8名 小学生11名 中学生11名 高校生6名 措置外4名 計40名

- 1日 幼稚園運動会 晴天に恵まれ子どもたちは元気いっぱい走る カメラを片手に精一杯の応援を送る
- 8日 山形国際ドキュメンタリー映画祭にて刀川和也監督「隣の人」上映 8年間に及ぶ光の子どもの家への取材を経て完成した本作は離れて暮らす親と子の溝と光の子どもの家の家族のような生活を見つめた映画となっている 同映画祭にてニュードックスジャパン部門入選 是非多くの方々に観て頂けるよう祈る
- 11日 中学校との連絡会 今年は11人の中学生がいる光の子どもの家 受験生も4人と多くより綿密な連携が必要となる こちらの要請に快く応えてくださる中学校の諸先生方に心より感謝
- 12日 赤十字奉仕団による除草作業 光の子どもの家後援会によるそば会 厚いご奉仕に心より感謝
- 18日 小舎制養育研究会鹿児島大会へ菅原哲男理事長と田中郁夫施設長と高野真夕子保育士が参加
- 26日 諸川教会若月健吾牧師による職員礼拝 感謝
- 29日 聖学院大学ワークに9名来訪 子どもたちと目一杯遊んでいただく 青年期の貴重な時間を子どもたちのために遣って下さる 心より感謝
- 11月
- 3日 第96回理事会と第27回感謝の集い 晴天の下でお

集まり頂いた多数のご支援者の皆さまへ感謝のおもてなし 次の一年も皆さまに見守られながら力強く歩む決意を確認

- 5日 養育を語る会へ菅原理事長と鈴木洋一指導員 光の子どもの家自立進学基金総会にて理事の再任を可決 これまでのご報告と感謝を伝えこれから卒園していく子どもたちのためにより一層のご協力をお願いしている
- 24日 I L B S国際福祉協会より6名来訪 光の子どもの家の見学とこれまでの多大なご支援にて改修した箇所をご覧いただく 心より感謝
- 27日 第1アドベント礼拝と祝会
- 28日 日本社会事業大学藤岡孝志教授による施設内研修 6ヶ月間のアメリカでの研修を終え新たに理論を進めて共感疲労やF R行動などについてご教示頂く 心より感謝
- 29日 川越児童相談所訪問調査
- <10、11月の物品ご寄贈者>
鈴木明 中村一彦 瀬田慰子 松本明子 江原正子 上山敦子 根岸亜麗朱 角尾和子 林正三 菅原真由美 石川順江 小野田喜代子 樋口智子 セカンドハーベストジャパン 市川由紀子 加部芳子 杉山和俊 藤田陽子 後藤利子 他多数の各位様
- ☆昨年中のあたたかいご支援本当にありがとうございました 本年もどうぞよろしくお願いいたします (洋)

////// ———— [反] [射] [光] ———— ////

☆新年明けましておめでとうございます☆
 ☆十二月に入ってから多くの卒園生から「正月には帰るよ」との電話やメールがありました☆
 ☆社会に出て頑張っている卒園生たちの元気そうな声を聞いてホッと安心したり帰ってくる事を聞いて喜ぶ子どもたちを見てみると何だか温かい気持ちになります☆
 ☆卒園生と子どもたちの会話を聞いてみるとそれぞれの成長を感じていく中에서도色々な事を考えているんだなあと思われます☆
 ☆子どもたち一人ひとりについて一年間でこんなに成長するものかと驚かされております☆
 ☆光の子どもの家のお正月の風景は賑やかです☆
 ☆ただお正月に自分の家に帰れる子どもが数減ってきているのも事実☆
 ☆子どもだけでなく家族に関わる事も私たちの重要な仕事です☆
 ☆その側面から見ると喜んではかりはうれしませんが☆
 ☆更に進めなければ実現しない家族とのやりとり☆
 ☆子どもたちが思春期を迎え始めた時に避けては通れない「自分とは何か」という問い☆
 ☆子どもたちに寄り添い子どもたちの家族と向き合う☆
 ☆私たちだけでは到底追いつかない日々を支えとお祈りに感謝しつつ今年もお願いばかり☆
 ☆本年もどうぞよろしくお願い致します☆

(洋)